

社会主義と資本主義の統一
——台湾の経済的経験と中国の市場経済

魏 萼
台湾・国立中山大学教授

1. 儒教文化圏

儒教文化圏——箸・文化圏としても有名であるが——は、第2次世界大戦後、目覚ましい成功をなしとげた。日本、韓国、香港、シンガポールおよび台湾の経済的業績は、儒教文化圏の名声に寄与した。儒教文化圏はまた、中国本土、北朝鮮およびベトナムを含むが、これらの地域は比較できる経済的業績をなし遂げてはいない。実際、儒教・社会主義経済地域は儒教・資本主義経済地域とは大変な対照を示している。(1)

儒教・資本主義地域は経済的成功を達成するために自由市場経済を採用した。儒教・社会主義地域は計画統制経済を採用し、彼らの経済的成功は儒教・資本主義地域のそれとは匹敵しない。

儒教文化と資本主義経済発展

5つの儒教・資本主義地域における第2次世界大戦後の経済的業績は、マックス・ウェーバーの予言とは対照をなしている。ウェーバーは、プロテスタントの国ぐににおける経済発展が起こったのは、プロテスタンティズムの倫理が資本主義の精神を含んでいるからであるということを経験論化した。プロテスタントの文化は積極的に社会を変革するために経済を支配し、ウェーバーはこの楽観的な、進歩的な世界観を経済発展と相互関連させている。勤勉、節約、独創性および人類への奉仕といった文化的価値は、ヨーロッパの資本主義社会の発展の発展を駆り立てる理性的な要因であった。

ウェーバーにとって、儒教社会は資本主義精神を欠いていた。彼は、儒教諸国はより消極的であり、彼ら行動はより理性的でない、と見ていた。儒教倫理は経済発展の助けとはならなかった。(2) ウェーバーの意見は偏っているが、彼の知識は第2次世界大戦前の彼の時代の中国、韓国および他の多くのアジアの国ぐにに限られていた。アジアの経済的 culture はウェーバーが描写した通りであったが、彼は、儒教・資本主義経済地域の第2次世界大戦後の成功以前の1920年に死亡したのである。儒教は宗教ではなく、道徳的な教え、社会のための倫理的な掟(おきて)なのである。

たぶん、ウェーバーは本来の有益な儒教の教義を振り返らなかったのだろう。資本主義の精神はプロテスタンティズムの独創性、節約、個人主義、奉仕、勤勉という価値から恩恵を得ている。この倫理と資本主義精神とのつながりは、儒教の哲学においても見出さ

れる。儒教倫理は資本主義と同じ精神を持っており、儒教文化は西洋の資本主義経済発展より先行しているのである。この点に関しては学者（の意見）は異なる。つまり、ある者はウエーバーに同意し、またある者は同意しない。ウエーバーは儒教の真の精神を察知していない。彼の考えは儒教文化に対するゆがんだ理解によって損なわれている。

ウエーバーの哲学はアダム・スミスの『国富論』に似ている。国富論は、いかに見えざる手が個人の富の蓄積が国家の富の創造を励ますかを叙述している。ウエーバーは理性的な労働倫理と国民の行動に基づいて資本主義の本質を高く評価した。儒教的資本主義はスミスの理論と似ている、もっとも、おもな違いは、個人の観点から経済的合理性を評価したスミスの古典的な理論にあるけれども、儒教において、経済的合理性は、共同体の価値の調和から生じるのであり、ただ単に個人ではなく、社会全体〔の価値〕なのである。

儒教的文化は資本主義の精神を現し、第2次世界大戦後の経済発展に積極的に影響を及ぼした。儒教は、マックス・ウエーバーが西欧資本主義の発展に有益と見たプロテスタントの精神に似た資本主義の精神を含んでいる。

他の学者は儒教の本質を誤解した。例えば、ハーバード大学の中国専門家であるジョン・フェアバンクは封建主義についての彼の理論を構築する際に真実の儒教を誤解していた。中国は封建的な歴史を確かに持っているが、封建主義は中国の政治史の要素であって、その経済史（の要素）ではない。ヨーロッパの封建主義は社会経済的な意味で存在したが、中国の歴史のアジア的な封建主義とは違っていたのである。⁽³⁾

儒教文化と経済発展との相互間連については多くの人々が疑いを持っている。私の議論寄りのもう一つの実例に留意されたい。東南アジアの華僑は東南アジアの諸国民の中で傑出した成功をなし遂げた。フィリピン人やマレーシア人あるいはインドネシア人が台湾や香港、韓国あるいは日本に移民するとすればどうかを想像されたい。これらの国民は経済的な奇跡を作り出すことができるだろうか。もしこれらの国民が台湾や香港、韓国あるいは日本に移民したとすれば、彼らが儒教文化集団の目覚ましい経済的発展を示すかどうか専門家たちは疑っている。その答えは否定的なものである。彼らは経済的な奇跡を作り出すことはできないだろう。このことは経済発展における文化の意義を示している。⁽⁴⁾

西欧資本主義の経済史において、重農主義的理論、重商主義、古典派および新古典派、また新経済学は基本的に自由な経済体制を信奉した。しかし、徐々に資本主義経済地域は必要とされる政府の干渉の度合いを決定するために、内的および外的な社会経済的な環境により依存している。重農主義的な理論は経済学の自由放任理論を強調した。しかし、重商主義者は政府の役割に焦点を合わせて、政府の政策が貿易収支の黒字を拡大し、金と銀の準備を蓄積することを支持している。古典派はアダム・スミスの古典主義からアルフレッド・マーシャルの新古典主義、それからジョン・M. ケインズの「新経済学」へ発展していった。あらゆる時代において、政府の役割は変化したが、数百年間の西洋の資本主義を通じて、政府の変わる役割は貴重な伝統であることが明らかになった。現代の資本主義はもともとの資本主義ではなく、またどんな以前の資本主義の一部でもない。

第2次世界大戦後の西欧、北米および日本の経済は伝統的な資本主義に対する調節を示した。この新しい資本主義は政府の役割、特に自由経済における社会福祉の機能を浮き彫りにさせた。政府と社会政策との結合は東洋的資本主義、または新資本主義と呼ぶことができる。第2次世界大戦後の西欧と北米の資本主義経済は、18および19世紀の資本主義とは大変異なっており、従って、中国国民は西洋資本主義を再評価すべきである。

2. 平和的な産業革命

儒教的資本主義経済地域

第2次世界大戦後の東アジアの資本主義諸国は、社会的混乱を免れた、新しい、平和的な産業革命を経験した。第2次世界大戦後、日本、韓国、シンガポール、香港および台湾などの東アジアの儒教的資本主義諸地域は、経済的成功を果たした。

それぞれの儒教的資本主義文化地域は、その経済発展において異なっている。日本的資本主義は一つの例である。シンガポールの島・都市型資本主義、韓国式資本主義、香港・九竜の植民地式資本主義および孫文の中国式資本主義または台湾の中国式資本主義経済などは、また別な例である。⁽⁵⁾

日本は縦的な儒教的資本主義の一形態である、国家寄りの儒教的資本主義を発展させた。韓国も同様であり、その経済構造はもう一つの日本になろうと準備している。中国の儒教的資本主義地域（台湾、シンガポール、香港、また東南アジアの華僑地域も）は横的な儒教的資本主義をたどっている。

縦的な儒教的資本主義経済地域は大規模な工業社会、つまり、技術と資本の集約した工業生産の階層制度を発展させた。横的な儒教的資本主義経済地域は中小の企業と貿易によって特徴づけられる。日本と韓国の民間部門は、技術と資本の集約した製品を生産する重工業を操業している。縦的な儒教的資本主義において、経済的基盤は非常に強固、つまり強く、健全である。

台湾は異なっている。台湾政府は主要産業において主要な役割を果たさなければならず、このため、台湾は国有、また県有の産業の積極的な役割を強調している。1990年に、勸告や日本の民間部門の大型の産業がGNPの大部分を寄与した。台湾の民間部門の産業は中または小型で、大抵の巨大な、重工業、技術と資本の集約した産業は政府に属している。横的な儒教的資本主義の経済発展と縦的な儒教的資本主義の経済発展との相違は、統計によって証拠だてられる。つまり、台湾の最大の産業は台湾のGNPの約10%を生産するが、日本の最大の10の産業は韓国の総GNPの約50%を生産している。⁽⁶⁾

中国の儒教的資本主義

中国は資本主義を志向するアジアの経済国である。中華民国、台湾は自由経済体制に基づいた理論である孫文の三民主義に、また、政府の役割を強調し伝統的な中国の経済思想

史を代表する中国式資本主義に負っている。中国の国民は政府が自由経済の悪弊を調停する仲介者として行動してもらいたいと願っている。自由経済体制における政府の役割は資本主義の本質を損なわず、反対に、政府の介入は資本主義をより健全でより合理的なものにする。政府の政策は社会の道徳的情緒の病弊をやわらげる倫理としての役割を果たす。

3. 東西経済思想比較

中国の経済思想は、2、000年以上も前に道教と共に始まった。道教は自然がそのコースを取り、事象がその自然な道をたどることを認める。道教の哲学は重農主義理論と似ている。道教の後に来た法治主義は政府の役割を強調した。それは重商主義と似た思想学派である。その後、儒教、新儒教、それから孫文の三民主義、つまり人民の解放がやってきた。儒教と新儒教は西洋の経済思想になぞらえることができる。孫文のプラグマティックが自由主義は、ケインズの実際的な経済学に比較されうる。特定の歴史的な細かいことは異なるが、西洋の経済思想史は中国の経済思想史に類似している。どちらも資本主義の歴史を代表している。

中国と西欧の資本主義の主要な違いは、政府の役割、特に官有産業に対して中国の関心（注目）の中心（が向けられているということ）である。伝統的な中国哲学の一つの重要な教義は、中国人は貧乏については心配せず、収入の分配の不公平に関心を寄せているということである。この考えは強く中国人に影響を与え続けており、彼らは西洋の資本主義の歴史を、18および19世紀のヨーロッパとの特別な関連を持って考えている——その当時は、金持ちはあまりにも金持ちであり、貧乏人はあまりにも貧乏であった。金持ちと貧乏人とのかけ離れた収入のギャップ（格差）は、社会的な問題と混乱をつくり出し、中国人に特別な懸念を引き起こした。これに関して、中国の経済史は異なった資本主義を指し示している。

中国史は大体、自由市場経済、私有財産制度の歴史である。中国の自由経済はプロレタリアートではなく、資本家の政治史を持っている。中国史は政治哲学と経済哲学とに分けることができる。歴史的に、中国の経済哲学は、政府の役割を強調しながらも、自由経済の精神を害しない自由経済に基づいていた。中国の専門家たちは中国の封建主義の性格を注意深く考察する。中国の封建主義は西欧の封建主義とは経済的には異なるが、政治的には似ている。中国の経済思想史は計画された命令経済ではなく、資本主義的な自由市場経済を信奉している。それで、毛沢東は、外国の資本主義の影響がなくても、先頭的な中国の封建社会の商品経済の発展を通して、中国は必然的に資本主義になっていただろうと、述べた。資本主義は中国の経済体制の性格そのものであり、毛はそれを除去しようとしたのである。

次の点を留意されたい。中国経済思想史において、社会政策は存在していたが、社会主

義は存在していなかった。中国経済思想史は自由市場経済における社会政策、一種の社会資本主義を含み、社会主義は含まない。私はこの区別をし、中国の経済発展の歴史が後進的な経済を示していると考え、中国専門家たちに注意を促したい。

4. 孫文博士の経済思想

台湾の自由経済において、政府は積極的な計画機能を果たしているが、台湾の経済は社会主義の計画（された）経済とは異なる。計画経済は全体主義的な政府の経済統制であるのに対して、台湾の経済計画は政府の指導である。本質的な違いは社会主義的な計画経済と中国式の資本主義との間に存在する。中国式の資本主義において、政府は自由経済の基礎を補完するが、自由経済の精神を取換えはしない。経済計画は資本主義の精神を損なわず、かえって市場の仕組みをより効果的にすることにより、資本主義を促進させる。

孫文はマルクス主義の唯物的な思想史を誤りと公言し、カール・マルクスを、唯物論を誤解し、その理論から社会の進化と歴史を省略したとして、批判した。孫文は大変はっきりと、社会福祉と人民の生計が社会進化の中心であり、社会進化は歴史の中心であると述べた。彼が死亡する日まで、孫文は、歴史の中心は人民の福祉と生計であって、ただ単なる唯物的な福祉ではないと確信していた。孫文はマルクスに考えと哲学を理解していたが、彼の方法は理解してはいなかった。⁽⁷⁾

孫文はマルクスの階級闘争理論に反対し、階級闘争は異常であり、社会的な病気であると特徴づけた。孫文は、マルクスは、資本主義の腐敗がやがてプロレタリアートを振るい立たせるだろうと予言をしたことで、間違っていたと感じた。孫文は、マルクス主義思想を受け入れなかった。伝統的な資本主義は社会政策を欠き、社会の混乱を引き起こし、腐敗の源泉になるかもしれない。孫文は、正義をもたらし、資本主義の腐敗を防ぐために社会福祉政策を導入した。彼の健全な福祉政策は、必要とされた公共出費、また公有産業体制とを含んでいた。

孫文は西洋資本主義を批判したが、彼はもちろん資本主義を拒否したのではなかった。彼は西欧の18および19世紀の伝統的な資本主義の社会経済的な問題を避けようとしたのであった。孫文はの理念は人民の生計の重要性を強調し、中国式の資本主義と西洋式の資本主義との主要な違いである、社会的な正義を通じて、社会経済的障害を防止しようと提案した。両資本主義ともヒューマンイズムの合理性を見ている。西洋式の資本主義、つまり福祉資本主義は社会経済的不公正をそれが起こった後で解決する。中国式資本主義は、より積極的なアプローチを取り、社会的な問題が起こることがないように防止する政策を策定する。これが中国式資本主義と中国式社会主義との主要な違い——儒教式資本主義とマルクス主義的社会主義との主要な違い——である。

5. 儒教文化と社会主義

中国本土を考えられたい。1979年以前の中国と1979年以後の中国との政策の違いがある。1979年に、とう小平政権は開放と貿易自由化の政策を採用した。この経済開放は1979年以後のマルクス＝レーニン主義の中国化――それは中国文化をマルクス＝レーニン主義文化以上に強調した――例である。中華人民共和国指導者は今や、中国文化を高く評価し、彼らは中国文化をマルクス＝レーニン主義文化以上に強調している。儒教文化は中国文化の主流なのである。1979年以降、中国本土の経済は、1979年以前の政策――それはマルクス＝レーニン主義式の中国文化、つまり、マルクス＝レーニン主義の中国化の逆転、を強調した――に比べて、非常に向上した。1979年以前の経済政策は中国文化以上にマルクス＝レーニン主義文化を高く評価した。

1979年以後の中国本土は、中国および儒教の文化からのいっそう増大した影響を受け、中国の経済発展は好転した。この2つの時期の比較は歴然としている。1949年から1979年までの中国文化のマルクス＝レーニン主義化は、1979年以後のマルクス＝レーニン主義の中国化とは劇的な対照をなしている。中国文化のマルクス＝レーニン主義化は共産主義イデオロギーによって非常に抑制された。マルクス主義の中国化と共に、経済の意思決定者たちはよりプラグマティックなアプローチへと移っていった。従って、長老の指導者とう小平の猫理論――つまり、猫は、それがねずみを取る限り、それが黒であろうが白であろうがかまわないというわけである。

1980年以降、共産中国の指導者たちは孫文の理論に正当な敬意を示し始めた、もともと、彼らは孫の哲学を中国式社会主義と解釈したのであったが、中国の共産主義者は、民生主義は中国式社会主義に従っていると言うが、それは彼らの重大な誤りである。共産中国式の社会主義はマルクス＝レーニン主義思想に依存し、依然、計画経済を基礎としているので、生産原料、機械、道具、資本準備、土地、財産、および商業的企業は政府によって所有されている。共産中国式の社会主義は計画経済に基づいており、台湾の経済体制とは異なる。

孫文の民生主義は強力な資本主義少数派が経済において独占企業をつくらせないように作用する。独占的な状況は自由経済を害する。孫文は民生主義を、オットー・ビスマルクの国家社会主義と同様な、国家社会主義と呼んだが、それは実際、国家社会主義体制内部の資本主義であった。今日の用語で言えば、孫文は社会政策のことを意味していたのであって、社会主義のことを意味していたのではなかった。なぜなら、民生主義の経済的基盤は自由経済と私有財産制度であったからである。国家社会主義に当たる正しい用語は国家資本主義である。孫文もビスマルクもどちらも小さな集団資本家たちが経済を独占するを防ごうとしたのであった。どちらも国有企業政策を社会の調和を損ない、収入分配の不公平を醸し出すかもしれないような諸々の影響を緩和する手段と認識していた。孫文は、公有産業は自由経済の働きを非常に健全で健康的に助けるために実験することができるということを理論化した。孫文とビスマルクの国家社会主義は実は、自由経済のもとでの社会政策あるいは資本主義のもとでの社会政策であったのである。この社会政策は二つの要

素を持っていた、政府の出費と国有産業とである。

6. 社会主義と資本主義の統一

しかし、1991年12月25日のソ連社会主義の崩壊と1979年以降の中国社会主義の改革派のアプローチの後、東欧諸国を含むかつての社会主義圏はその経済体制を資本主義的社会主義へと急激に変革した。

しかし、長期的には、ある程度彼らは現在の経済体制に逆行して再び、社会主義的な資本主義へと再調整するであろう。もちろん、今日の中国本土を含めて、彼らはいわゆる社会主義を中国的な特徴と順応させつつあるが、予見できる将来、彼らは中国的な特徴を持った資本主義（の道）をたどって行くのであろう。それが過去約40年間の台湾の経済発展の経験であったからである。

参考資料：原文参照のこと